

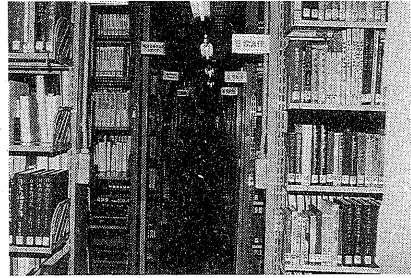
国立劇場図書室

当館の中堅職員研修の一行に加わって、国立劇場本館3階にある図書室を初めて訪れた。

日本の古典芸能を伝承するため、国立劇場設立運動が推進されたのは、明治19年頃だが、困難をのりこえ国会で、法案が成立したのは昭和41年まで待たねばならなかった。図書室の開室は、劇場開場翌年の同42年のことである。

所蔵資料は、寄贈、購入及び当劇場が作成したものなどで構成されているが、図書、逐次刊行物及び、筋書など約9万8千冊、図書類以外の資料は、約17万点所蔵されている。特に筋書は、興行の記録として力をいれ、近年には主な興行会社から定期的に寄贈されている。(逐次刊行物類は、大半が寄贈で、関係論文収載を含めると約1,100種に達している。) ともかくここでは、寄贈資料のしめる位置は大きく、文化・文政期の芝居版画や、花柳章太郎、榎本健一使用の上演台本などから、幕末、明治期の芝居番付、喜多村緑郎、市川翠扇等の遺品類などがある。芝居や芸能に関心のある人にとっては、どれも見逃せないものばかりだ。これらの資料が、書庫にはところ狭しと、びっしりつまっていた。

所蔵図書については、書名、著者名、分類の各カード、また歌舞伎、文楽、戯曲一般などは作品名のカードから検索できる。(冊子目録としては、「図書目録」I・II、「芝居版画等図録」I～IV、「義太夫節レコード目録」「国立劇場公演記録資料目録」〈視聴覚資料篇I〉である)



一般の利用は、誰でもできるが、閲覧のみで、原則として開架ではない。閲覧室は数席でこじんまりとしていた。利用者の多くは、学生や演劇関係者でここで長時間閲覧するというより、あらかじめ必要な資料がわかっている、それをコピーして帰るケースが多いということだった。(貴重書以外はコピー可能なので)

書庫、閲覧室の他に、視聴覚室や展示室も完備され、自主企画映画は、学校、文化団体等に貸出が行なわれているし、定期的に公演記録映画会も、第2土曜日午後2時から、実施されている。

幸いなことに、図書室の見学の前、私たちは、大劇場開演前の花道や、舞台にあがらせて頂き、奈落を通して舞台裏も見学させて頂いた。華やかな舞台をつくりあげていく裏方の苦勞と、多面的な方法で民衆に伝統文化を伝えようとしている図書室の役割が、見学後、私の胸に重なってひびいてきた。それと同時に、当館書庫にも所蔵されている膨大な上演資料集、その他の資料が、前より身近なものに思えてきた。

(アジア資料課 宮島安世)